

## カツオ 東部太平洋

(Skipjack, *Katsuwonus pelamis*)



### 最近の動き

東部太平洋における本種の最近の資源評価は全米熱帯まぐろ類委員会 (IATTC) 事務局により 2012 年に行われ、資源状態は不確実であるが、資源が悪化する明確な証拠はないされました。2017 年には、前年までの漁業・生物学的指標値 (まき網による漁獲量、FAD 操業 CPUE、素群れ操業 CPUE、標準化努力量、平均 (漁獲個体) 重量、相対資源量、相対加入量、相対資源利用率の 8 つ) が更新された。また 2016 年 6 ～ 7 月に開催された IATTC 第 90 回年次会合において、漁獲管理ルールについて合意された。

### 利用・用途

主に缶詰原料として利用されている。

### 漁業の概要

東部太平洋における 2016 年のカツオ総漁獲量は約 33.8

万トンと推定された (表 1: IATTC 2017)。2016 年の国別の漁獲量ではエクアドルが全体の約半分を占め、米国、パナマ、コロンビア等が続いている。日本は、本海域でカツオを主対象とした漁業を行っておらず、漁獲量ははえ縄によってまぐろ類に混じって漁獲される数十トン程度である。1950 年～ 2016 年までの漁法別カツオ漁獲量の推移を図 1 に示す。本海域では、1950 年代までは沿岸での竿釣りが主であったが、その後大型の竿釣り船がまき網船に転換し始め、1960 年代からまき網による漁獲量が増大した。1978 年に約 17 万トンとなってピークに達し、1985 年前後に 5 万～ 6 万トン台まで減少したが、その後は再び右肩上がりに増加を続け、20 万～ 30 万トンレベルを維持している。漁場は沖合に広がり、現在では漁獲量のほとんどがまき網によるものである。東部太平洋のまき網では、漁獲物の一部が投棄されることがあるが、投棄量は年々減少してきており、1998 年は漁獲量の 16%、2012 年は 1% 程度であった (IATTC 2014)。

表 1. 東部太平洋におけるカツオの国別漁獲量 (単位: トン) (IATTC 2017)

年	エクアドル	メキシコ	米国	ペネズエラ	バヌアツ	コロンビア	パナマ	スペイン	その他	合計
1987	20,686	6,390	14,171	11,761					13,458	66,466
1988	12,455	17,638	38,547	12,312			1,941	9,234	92,127	
1989	23,900	16,608	22,357	16,847			4,452	14,757	98,921	
1990	26,273	7,074	13,305	11,362	11,920		3,425	3,748	77,107	
1991	20,370	11,680	14,070	5,217	9,051	22	1,720	3,760	65,890	
1992	26,459	9,854	15,283	10,226	13,315	95	3,724	8,338	87,294	
1993	23,057	14,763	19,835	7,270	10,908	3,304	1,062	9,720	89,919	
1994	15,557	13,057	10,908	6,356	9,541	7,361	2,197	9,193	74,170	
1995	33,519	32,510	16,049	5,508	13,910	13,114	4,084	15,594	134,288	
1996	33,206	16,501	12,528	4,104	10,873	13,318	3,619	13,692	107,841	
1997	51,860	25,606	14,634	8,617	14,246	12,332	4,277	25,375	156,947	
1998	67,255	16,968	7,640	6,795	11,284	4,698	1,136	20,012	7,058	142,846
1999	125,685	18,793	13,500	16,344	21,287	11,210	5,286	34,923	18,175	265,203
2000	104,911	14,256	7,229	6,720	13,620	10,138	9,573	17,041	22,522	206,010
2001	66,144	8,617	4,159	3,215	7,824	9,445	6,993	13,454	25,011	144,862
2002	80,378	7,228	4,593	2,222	4,657	10,908	9,816	10,546	24,194	154,542
2003	140,190	8,784	5,556	6,143	14,112	14,771	25,084	18,567	44,810	278,017
2004	89,621	24,957	10	23,356	4,404		20,199	8,138	29,485	200,170
2005	140,927	33,570	18	22,146			25,876	9,224	34,778	266,539
2006	138,490	17,225	15	26,334	0		44,753	16,668	54,429	297,914
2007	93,684	21,818	2	21,990			28,475	2,879	41,027	209,875
2008	144,562	22,137	17	28,333			43,230	4,841	56,330	299,450
2009	134,117	6,998	892	19,370			26,973	6,021	38,975	233,346
2010	83,962	3,010	22	11,818		11,400	19,213	1,569	19,330	150,324
2011	150,890	11,899	30	27,026	1	23,269	29,837	5,238	30,105	278,295
2012	153,480	18,259	8	20,829	4	15,760	25,786	15,773	20,109	270,008
2013	173,876	17,350	16	17,522	20	22,168	31,025	2,900	16,916	281,793
2014	172,239	8,783	585	13,767	35	22,732	21,781	5,581	17,393	262,896
2015	208,768	23,497	16,995	4,788	29	16,431	31,427		28,406	330,341
2016	190,841	13,405	39,535	9,174	8	20,913	33,385	0	30,938	338,199

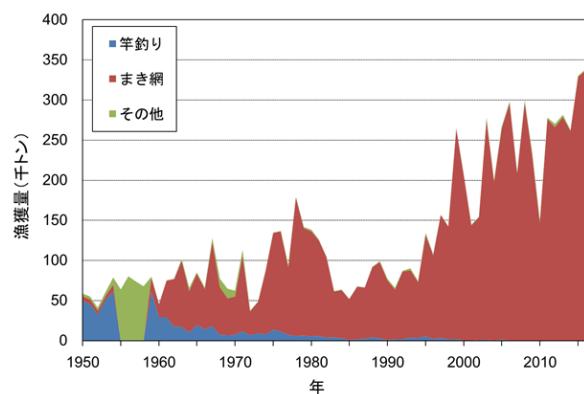


図 1. 東部太平洋におけるカツオの漁法別漁獲量 (IATTC 2017)

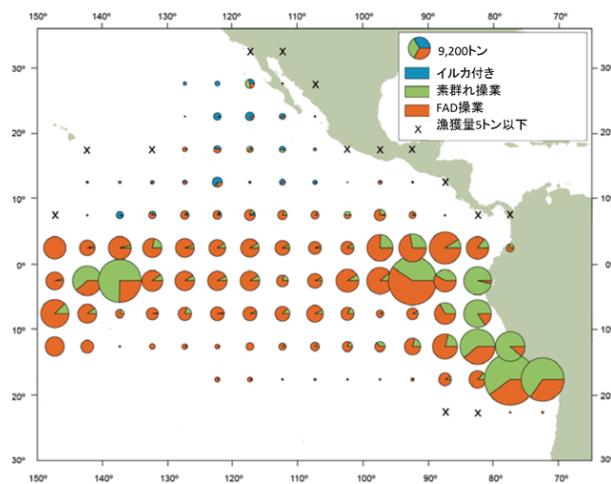
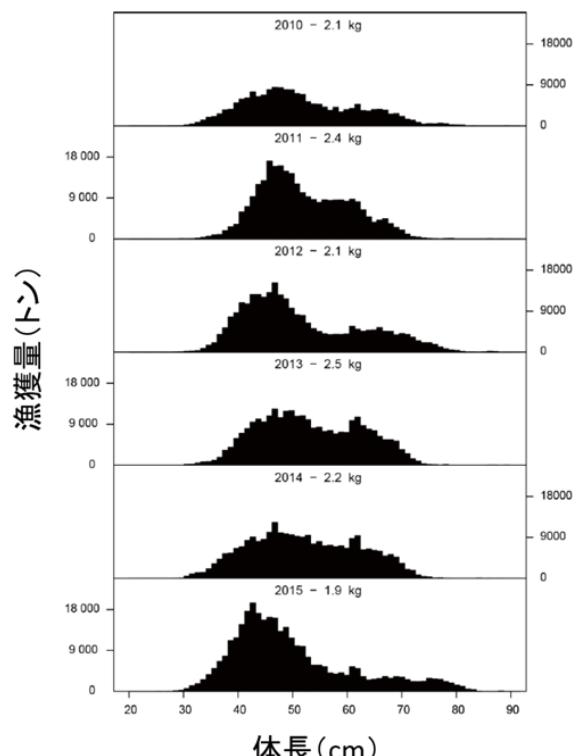


図 2. 2015 年東部太平洋におけるまき網操業別カツオ漁獲量 (5 度 × 5 度の統計値) (IATTC 2016)

図 3. 2010 ~ 2015 年東部太平洋でまき網及び竿釣りで漁獲されたカツオ体長組成の推定値 (IATTC 2016)  
測定対象の平均重量は各年の図上に示されている。

まき網漁場はバハ・カリフォルニア沖からペルー南部沖まで広がるが、メキシコ南部沖ではキハダを主対象としたいるか付き群れ操業が主体となるため、カツオの漁獲量は比較的少ない。赤道海域では漁場は西経 150 度付近の沖合まで達している（図 2）。集魚装置（FAD）を使用した操業は主に中米から北部南米沖で行われており、沖合にも広がっている。素群れを対象とする操業は、バハ・カリフォルニア、中米、北部南米沖で行われている。まき網によって漁獲されたカツオの体長は 30 ~ 80 cm で、年によって漁獲組成のモードが異なる傾向があるが、概ね 40 cm 半ばと 60 cm 半ばにモードが確認できる（図 3）。

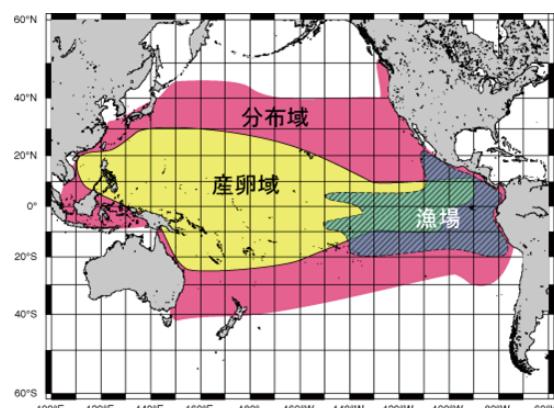
竿釣り漁船は、南カリフォルニアからチリ北部にかけた距岸約 250 海里以内の海域と沖合の島嶼周りで操業を行っていたが、現在ではエクアドル、メキシコ、米国籍のわずかな数しか残っておらず、エクアドル、メキシコ、南カリフォルニアの比較的沿岸近くで操業している。

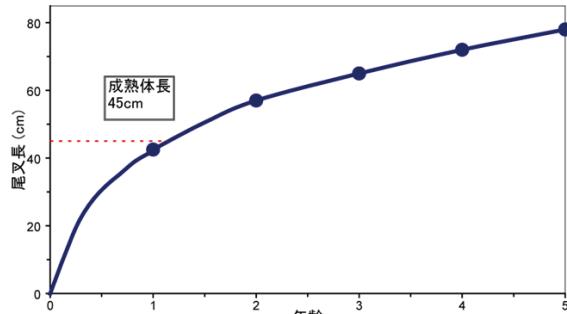
### 生物学的特性

カツオは 3 大洋全ての熱帯～温帯水域、概ね表面水温 15°C 以上の水域に広く分布する（Matsumoto *et al.* 1984）。適水温帯の分布にあわせて、東部太平洋における分布域は中西部太平洋に比べて南北に狭くなっている（図 4）。太平洋においては単一系群とする説と複数系群とする説があるが（鈴木 2010）、資源管理上は東部太平洋と中西部太平洋に分けて資源評価が行われる場合が多い。

産卵は表面水温 24°C 以上の海域で広く行われ、東部太平洋においても南北アメリカ大陸沿岸から西経 130 度、北緯 15 度から南緯 10 度付近の適水温帯で産卵が行われる。成熟体長は 45 cm 程度とされ、性比は 1:1 で、キハダやメバチで確認される高齢魚における雄の比率の増大は見られない。

成長は、耳石日輪の計数から得られた結果と標識放流・再捕データを組み合わせて、満 1 歳で尾叉長 40 cm 台後半、満 2 歳で 60 cm 台後半、満 3 歳で 70 cm 台と推定されている（図 5）。体長体重関係は、 $W=5.5293 \times 10^{-6} L^{3.336}$  等（W は体重 (kg)、L は尾叉長 (cm)）が用いられ、40 cm で 1.2 kg、50 cm で 2.6 kg、60 cm で 4.7 kg となる。寿命は 6 歳

図 4. 太平洋におけるカツオの分布と漁場  
(Matsumoto *et al.* 1984, Schaefer 2001)

図 5. 東部太平洋におけるカツオの成長 (Matsumoto *et al.* 1984)

を超える。

餌生物は他の海域同様、魚類・甲殻類・いか類で、選択性は低く、その海域で主要なものが主たる餌となっている。また、捕食者は、カツオ自身を含めた高度回遊性魚類のまぐろ類・かじき類、その他の魚食性魚と考えられる。

## 資源状態

東部太平洋における本種の最近の資源評価は IATTC 事務局により 2012 年に行われ、4 つの手法 (a. 漁業・生物学的指標値; b. 標識データ解析; c. サイズ組成資源評価モデル; d. 空間資源動態モデル) の結果から、資源状況は不確実であるが、資源が悪化する明確な証拠は無いとされた。この結果は、①まき網の CPUE が資源量に比例しているかどうか不明であること、②漁業の影響が小さい大型カツオ資源の存在可能性、③中西部太平洋のカツオ資源との関連が不明であることから、過去の資源評価と同様に予備的なものとされている。

資源評価が実施されない年には、前年までの漁業・生物学的指標値 (まき網による漁獲量、FAD 操業 CPUE、素群れ操業 CPUE、標準化努力量、平均 (漁獲個体) 重量、相対資源量、相対加入量、相対資源利用率の 8 つ) が IATTC 事務局より提示されており、2017 年にもそれら指標値が更新された (Maunder 2017)。

### a. 漁業・生物学的指標値 (2017 年の更新)

まき網による漁獲量は 1985 年以降増え続け、2003 年以降は高い水準で推移している (図 6 (a))。FAD 操業 CPUE は 1990 年以降、1999 年を除いて平均レベルで変動し、2016 年は高かった (図 6 (b))。素群れ操業 CPUE は 2003 年以降高く推移し、2015、2016 年は最も高い水準であった (図 6 (c))。資源利用度の指標となる標準化努力量は 1991 年から増加し、2009 年以降やや減少したが 2011 年以降はやや増加傾向を示している (図 6 (d))。相対資源量、相対加入量、相対資源利用率は 20 年以上増加傾向を示し、2003 年以降は高いレベルで変動している (図 6 (f)、(g)、(h))。

カツオ資源の懸案事項は、資源の利用率が近年は減少傾向に転じたものの、断続的に増加していることであるが、これらの指標からは増加による悪影響は認められなかった。2015、2016 年の平均重量は基準値を下回っており (図 6 (e))、過剰な利用の結果である可能性があるが、近年の加入が過去よりも多いこと、あるいは小型のカツオで占められた海域に

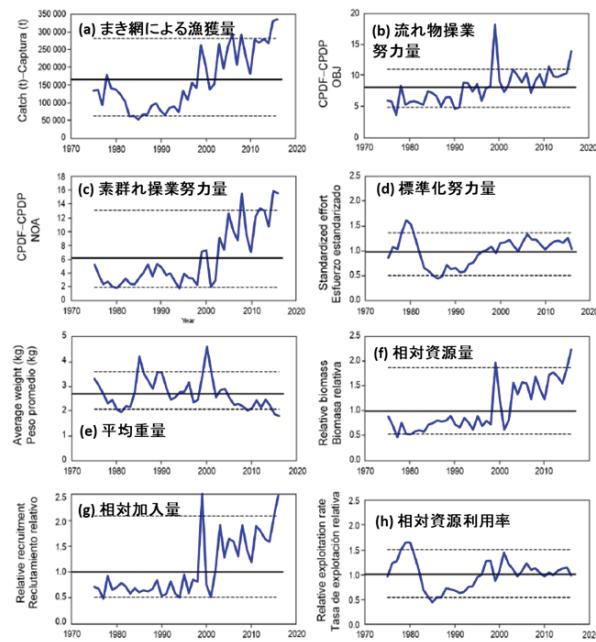


図 6. 東部太平洋におけるカツオ資源指標 (IATTC 2017 を改変)  
(a) まき網による漁獲量、(b) FAD 操業努力量 (CPUE)、(c) 素群れ操業努力量 (CPUE)、(d) 標準化努力量、(e) 平均 (漁獲固体) 重量 (kg)、(f) 相対資源量、(g) 相対加入量、(h) 相対資源利用率 (CPDF: Catch per days fished)。

漁業が拡大したことが原因かもしれない」とされた。

### b. 標識データ解析 (2012 年の結果)

放流時期が異なる 2 つの標識調査 (1973 ~ 1981 年、2000 ~ 2006 年) で得られたデータを分析し、漁獲率を求めた (Maunder 2012a)。資源評価のために定義された海域 (図 7) のうち、2 海域 (A と C) のみ推定値が利用可能であった。また、漁獲率の推定値は不確実性が高いとされた。

### c. サイズ組成資源評価モデル (2012 年の結果)

サイズ組成資源評価モデルは Maunder (2012a) によって開発されたモデルで、キハダ、メバチに適用された SS モ

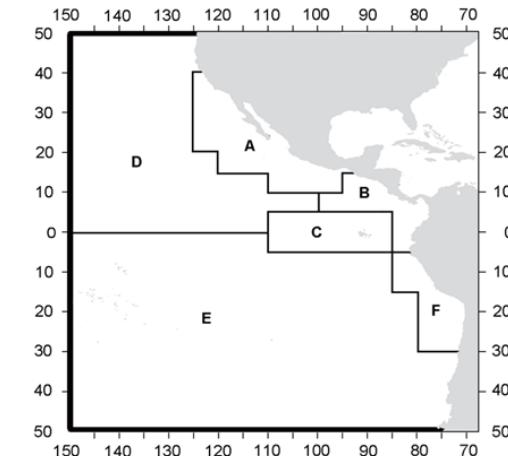


図 7. 東部太平洋におけるサイズ組成を考慮したカツオ資源評価のために定義された海域 (Maunder 2012b)

デルとは異なる。信頼性のある年齢データが無かつたため、標識データから成長に関するデータを算出した。CPUE と体長組成データに不確実性が伴うため、海域 B のみで信頼できる推定値が得られた。海域 B における資源量の推定値は、1999 年に特に高くなり、1980 年以降、増加傾向を示した（図 8）。

#### d). 空間資源動態モデル（2012 年の結果）

空間資源動態モデル（SEAPODYM）とは、外洋域の海洋生物物理環境から高次捕食者までをカバーした end-to-end 型の生態系モデルであり、高次捕食者の食物環境、産卵環境、ハビタット選択性や移動回遊を大洋規模で考慮している。このモデルを使用した解析により推定された東部太平洋における体長 30 cm 以上のカツオの資源量は、180 万～235 万トンであった（図 9）。

### 管理方策

本種を対象とする資源管理措置は IATTC において導入されていないが、メバチ・キハダの保存管理措置として、まき網漁業に対し 72 日間の全面禁漁及び沖合特定区での 1 か月間の禁漁が導入されており、結果的に本種に対する漁獲努力量は制限されている。

また 2016 年 6～7 月に開催された IATTC 第 90 回年次会合において、以下を内容とする漁獲管理ルールが合意された。

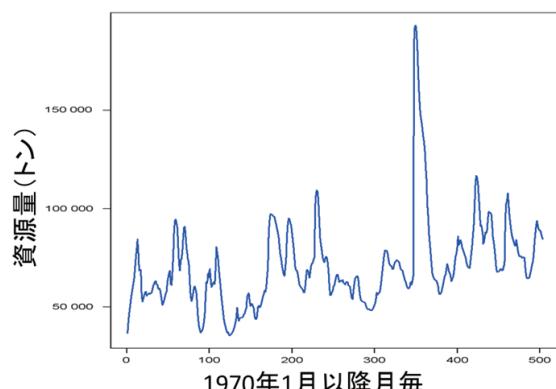


図 8. 体長組成を考慮した資源評価モデルで推定された Region B の月毎の資源量（Maunder 2012a）

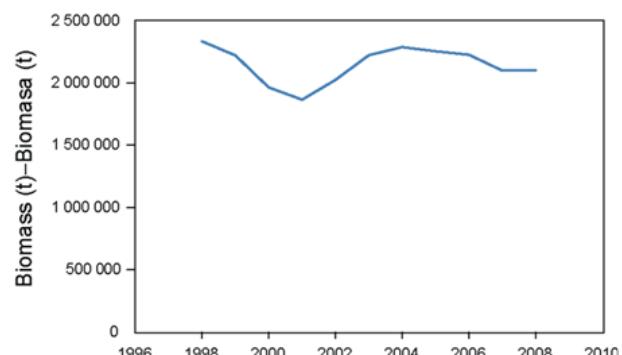


図 9. 空間資源動態モデル SEAPODYM によって推定された東部太平洋における体長 30 cm 以上のカツオの資源量（Maunder 2012b）

①最も厳しい管理を必要とする魚種については、まき網漁業に対する措置を複数年固定できるようにし、漁獲死亡率を、最大持続生産量（MSY）を達成する水準以上とならないよう維持する。

②漁獲死亡率が限界管理基準値（親子関係を想定し、加入が初期資源加入量の 50% に減少する状態における産卵親魚量を維持する漁獲死亡率）を超過する確率が 10% 以上となる場合、50% の確率で MSY を達成する水準以下となるまで削減し、かつ限界管理基準値を超過する確率を 10% 以下とする措置を可能な限り早期に実施する。

③産卵親魚量が限界管理基準値（親子関係を想定し、加入が初期資源加入量の 50% に減少する状態における産卵親魚量）を下回る確率が 10% 以上となる場合、50% 以上の確率で目標水準（MSY を達成する水準の産卵親魚量）まで回復させ、かつ限界管理基準値を下回る確率を 10% 以下とする措置を 2 世代以内 5 年以内のうちより長い期間中に実施する。

④まき網漁業以外の漁業に関する追加規制を事務局職員が勧告する際には、対象資源に与える相対的な影響も踏まえ、まき網漁業で採択された措置と可能な限り一貫性を持たせる。

### 執筆者

かつお・まぐろユニット

かつおサブユニット

国際水産資源研究所 かつお・まぐろ資源部

かつおグループ

青木 良徳

### 参考文献

- IATTC. 2014. Fishery Status Report 12 - TUNAS AND BILLFISHES IN THE EASTERN PACIFIC OCEAN IN 2013. IATTC. 1-180 pp.  
<http://www.iattc.org/PDFFiles2/FisheryStatusReports/FisheryStatusReport12ENG.pdf> (2014 年 11 月 14 日)
- IATTC. 2016. Fishery Status Report 14 - Tunas and Billfishes in the Eastern Pacific Ocean in 2015. IATTC. 200 pp.  
<http://www.iattc.org/PDFFiles2/FisheryStatusReports/FisheryStatusReport14.pdf> (2016 年 8 月 31 日)
- IATTC. 2017. Fishery Status Report 15 – Tunas, Billfishes and other pelagic species in the Eastern Pacific Ocean in 2016. IATTC. 191 pp.  
[http://www.iattc.org/PDFFiles2/FisheryStatusReports/\\_English/FisheryStatusReport15.pdf](http://www.iattc.org/PDFFiles2/FisheryStatusReports/_English/FisheryStatusReport15.pdf) (2018 年 1 月 31 日)
- Matsumoto, W.M., Skillman, R.A., and Dizon, A.E. 1984. Synopsis of biological data on skipjack tuna, *Katsuwonus pelamis*. NOAA Tech. Rep. NMFS Circ., (451): 1-92.
- Maunder, M.N. 2012a. A length based meta-population stock assessment model: application to skipjack tuna in the eastern Pacific Ocean. IATTC Scientific Advisory Committee (SAC-03-INF). 24 pp.

- <http://www.iattc.org/Meetings/Meetings2012/May/PDFs/SAC-03-INF-A-Length-based-meta-population-stock-assessment-model-DRAFT.pdf> (2012 年 5 月 17 日)
- Maunder, M.N. 2012b. Preliminary analysis of historical and recent skipjack tuna tagging data to explore information on exploitation rates. IATTC Scientific Advisory Committee (SAC-03-07c). 24 pp.
- <http://www.iattc.org/Meetings/Meetings2012/May/PDFs/SAC-03-07c-SKJ-tag-analysis.pdf> (2012 年 5 月 7 日)
- Maunder, M.N. 2017. Updated indicators of stock status for skipjack tuna in the eastern Pacific Ocean. IATTC Scientific Advisory Committee (SAC-08-04). 4 pp.
- [http://www.iattc.org/Meetings/Meetings2017/SAC08/PDFs/Docs/\\_English/SAC-08-04c\\_Skipjack-tuna-indicators-of-stock-status.pdf](http://www.iattc.org/Meetings/Meetings2017/SAC08/PDFs/Docs/_English/SAC-08-04c_Skipjack-tuna-indicators-of-stock-status.pdf) (2017 年 11 月 21 日)
- Schaefer, K.M. 2001. Assessment of skipjack tuna (*Katsuwonus pelamis*) spawning activity in the eastern Pacific Ocean. Fish. Bull., 99: 343-350.
- 鈴木伸明 . 2010. カツオ系群構造研究－系群構造に関しては現段階で確固たる結論は無い－. 遠洋水産研究所リサーチ＆トピックス .

カツオ (東部太平洋) の資源の現況 (要約表)	
資 源 水 準	高 位
資 源 動 向	横ばい
世 界 の 漁 獲 量 (最近 5 年間)	26.3 万～33.8 万トン 最近 (2016) 年: 33.8 万トン 平均: 29.6 万トン (2012～2016 年)
我 が 国 の 漁 獲 量 (最近 5 年間)	33～74 トン 最近 (2016) 年: 27 トン 平均: 53.6 トン (2012～2016 年)
管 理 目 標	MSY
資 源 評 価 の 方 法	サイズ組成資源評価モデル、 空間資源動態モデル
資 源 の 状 態	まき網素群れ CPUE と FAD CPUE から過剰に利用されていないと考えられる。
管 理 措 置	特定の措置はなし (メバチ・キハダの保存管理措置として、まき網漁業に対し 72 日間の全面禁漁及び沖合特定区での 1 か月の禁漁が導入されており、結果として本種に対する漁獲努力量は制限されている)
管理機関・関係機関	IATTC
最新の資源評価年	2012 年 (2017 年に指標値のみ更新)
次回の資源評価年	未 定